

## NPO法人新青樹理事長の竹内より子さんの講演

### 「冒険遊び場” プレーパーク” の重要性 ～子どもの生きる力を養うために～」の要約

世田谷の羽根木で日本で初めてプレーパークを始めた木村真三さんが書いた「冒険遊び場」という本を、鶴舞の古本屋でたまたま見つけた。それを読んで、自分のまちにもプレーパークをつくろうと考えた。知多市役所の教育や公園やあちこちの担当をたらいまわしにされて3年、静岡の渡辺達也さんを招いて講演会を開いたところ10人が聴きにきた。

公園の使い方が間違っていると思う。親が規制をかけ過ぎている。すぐに行政のせいにする。親が文句を言うから、公園に規制がかかる。

あなたたち親は、子どもにどう育ててほしいと思いますか？・・・(会場から「自立してほしいと思っています。」との声)

自立するには、経験させる、自分で決めさせる、そして、自分で結果責任を持つことが必要だ。しかし、命にかかわる危険は、親として回避する。子どもを守る必要がある。一方、擦り傷、切り傷、命にかかわらないことは、親はぐっと我慢しないとイケない。

ゲームで遊ばない。異年齢で遊ぶことが大事。  
精神科医の佐々木正美さんが、「自分よりも勝っている人を見ると劣等感、劣っている人を見ると優越感を感じるような“根拠のある自信”は自己肯定感がないと耐えられない」と言っている。

愛情に恵まれて育った“根拠のない自信”がある人は、異年齢の子どもと同じ時間と空間を共有して、教えたり、教えられたりできる。

ゲームを安易に与える親、学校の成績が良くないといけないと思っている地域、核家族化で、母親も子育てに悩んでいる。

上の子だけきちんと育てれば下の子が育つ。むかしは、兄弟がロールモデルだった。今では、上の子が下の子を見る環境がない。

プレーパークでは、上の子が下の子の面倒を見る、遊びの中での怪我は当たり前。自己肯定感はいささかからの積み重ねだ。子どもは何度でも失敗できる。失敗するチャンスがあって、何度でも立ち直れるのが子どもの特権だ。

尊敬するたっちゃん（渡辺達也さん）が「プレーパークは一週間だ。」と言っていた。お日様、お月様、火から水、木、金属や土もあって、自然豊かな野外で過ごすことを大切に

している。

自分は宮城県生まれで、子どもの頃、氷が張って滑ろうとすると、そこに大人が灰（滑り止め）をまいた。秘密基地もつくっては壊され、つくっては壊された。でも、子どもの秘密基地もスケートリンクも何度でも作りなおすことができる。

クマのプーさんの訳者で有名な石井桃子さんが言っている。「子どもたちよ、子ども時代にしっかりと楽しんで。老人になってからあなたを支えてくれるのは、子ども時代のあなたです。」

ロールモデル、反面教師のサンプルが、子ども時代にいっぱいあった方が良い。生きる力を養うためにプレーパークをつくりたい。

知多市の佐布里（そうり）でプレーパークを始めて、東海市のらんらんも立ち上げて、最終目標として東浦でプレーパークを開設できたら、引退しようと思心している。プレーパークは（点ではなくて）面でやるものだと思う。

行政を動かすのに 10 年かかった。自分の子どもはもう大学生になった。「お母さんはよその子のために遊んであげたけど、私とは遊んでくれない」と昔、娘に言われたことがある。そのとき、「あなたをいい子に育てるために、まわりの子もいい子に育ててほしいの。」と答えた。最近、娘も孫に同じことを聞かれたそうだ。ほかの子どもが元気で良い子に育つということは、「自分の子どもが育つ環境づくりに他ならない。」と考えている。

親が一生懸命にスマホや妖怪ウォッチを買い与えても、プレーパークで子どもが遊びに熱中すると、その辺に放置してある。親が電話で「忘れ物ありませんでしたか」と尋ねてくるので、子どもに自分で電話させてくださいと答えることにしている。

親が自分の子どもだけを育てようとすると、どうしても窮屈になる。地域で育てようとすれば、自己肯定感も湧いてくる。

色々な仲間と群れになって遊ぶことを親が勧めるべきだ。近年、公園で子どもの声がうるさいという苦情が増えているが、子どもの元気な声こそ地域の宝だと思う。

らんらんで子どもたちがバケツの水をかけ合って遊んでいたら、近所のおばあさんが「うるさい」と文句を言った。その時 2 年生の子どもがいみじくも言った言葉は「ばばあだっで子どもの頃があったよなあ」だった。大人自身が自分の子どもの頃のことを忘れてしまっている。

気持ちのある人はぜひボランティアでプレーパークに協力してほしい。